

文芸

俳句

オカリナの澄みし音色の秋思かな
池田 逸子
館内にわずかに拾ふ扇かぜ
伊藤 敬子
單弁で清楚が魅力秋ざくら
伊藤 定男
宵月夜障子の葉影山の宿
今関満喜子
演奏する名はしらねども秋の虫
魚地 照子
百日紅沙汰なき人の噂聞か
江森 悦子
コスモスや墓守絶えし兵の墓
大谷 武彦
かなかなや独居の爺も米を研ぐ
川島 孝夫
秋桜妻には妻の仲間達
川島 通則
山里の盆の芝居や「鬼来迎」
向後 寛
施餓鬼会の七夫在り立つや夢和讃
越川せつ子
ポイ捨てるの空缶騒ぐ風の秋
小松 藤男
賑わいの祭のあとの宮と月
佐瀬 輝夫
背に受くる風に晩夏の気配かな
宍倉 道子
風が好きコスモス風に逆らわず
鈴木とし子

コスモスの出迎えありし無人駅
鈴木 利子
編笠に笑顔かくれる風の盆
玉虫 栗扇
コスモスや色の競演畑の角
土屋美枝子
コスモスや気儘に降りる一人旅
土屋 義昭
養虫の揺れて何處へさまよへる
戸村 静華
休耕田百万本の秋桜
西崎さち子
空の青風の音にも秋をしる
早川 勇

短歌

いく度も共に旅せし友の死は
片腕もがれし思ひするなり
吉岡 信子
三十度越へる暑さに造花なる
花を供へし墓もありたり
八角 三枝
悪妻で良いから長く生きろれと
言ひたる夫は先に逝きたり
田崎 尚美
定植後雨なき畑に黒豆は
繁らぬままに花の咲き初む
青木 秀子
海の水温かなりしと日焼けして
九十九里浜より幼帰り来
押尾 輝子
佐瀬さんの歌の批評は温かく
励まされたり助けられたり
西山満里子

信濃路の女将の声は甲高く
十割蕎麦を勧めつづくる
鈴木まさ子
幾つもの病ひ持ちあし佐瀬さんの
前向きに生きし一生を思ふ
芹川 初子
夕暮れを一気に鳴きたす虫の音を
聞き分けむとし耳をすませり
島田ますみ
散歩道栗山川に伸ばそうと
友と歩んだ夕暮れの里
平山 芳子
暇な時ゆつくり見むと切り溜めし
新聞の記事読むことも無く
故 佐瀬 初音
夫逝きて独りの暮しも七年と
しみて思へり星空見つつ
齊藤つね子

百才の長寿のはずが現実は
所在不明の日本のさまは
鈴木 益郎
ゆれやまぬコスモスに來て蝶一つ
羽をたためてもにゆれいる
高梨 キヨ
バス停の路傍に揺るるコスモスの
たった一人の客を見送る
土屋 好
澄みし空コスモス匂ふ句会にも
年齢重ね酒脱な句あり
越川 義則

こうほう 博物館 31

秋のみのり

もう十月になると水田はすっかり稲刈りが終わり、涼しい風が吹くようになり、木の葉が色づく頃になって秋がいよいよ深まっていきます。この頃より採れる秋のみのりがあります。今日でこそ食料の足しにはしません、遠い昔の縄文時代では大切な食物として、盛んに収穫されたのが木の実です。その中で代表的なのは栗で、次いでどんぐりと呼ばれる椎や檜、また枹の実、胡桃、榎の実などがあります。

栗は今でも栽培され、秋を感じると店先にも並びますが、縄文時代では最も重要な食料の一つであったことが、最近の花粉分析研究で分かりました。どんぐりや枹は洪が多く、各地の縄文時代の遺跡から、洪抜き施設が見つかっています。どんぐりの中でも、椎・マテバシイ・ウバメガシは洪が少ないので、洪抜きをせずに食べられます。



坂田池公園のオニグルミ